

編集：山田浩司 & 美澄

Address: 2208 North Quantico Street, Arlington, VA, 22205, USA

Phone: 1-703-241-0621 E-Mail: mickev@pc4.so-net.ne.jp

ラスベガス家族旅行 (その1) Mikio, ベガスで大フィーバー



7月13日から17日にかけて、アメリカ西部ネバダ州のラスベガスに家族旅行に行ってきた。

当初の予定では、14、15日は後述の剣道講習会兼昇段審査に私が参加する関係で、14日の午前中は家族も講習会会場を見学し、午後は私が中抜けしてラスベガス市内で家族サービスに努め、15日朝にはカリフォルニア州パサデナに留学中の今西浩明さん、真美さんご夫妻が合流して私に代わって家族のお相手をしていただき、16、17日はアリゾナ

州北東部にあるモニュメントバレーまで車でドライブして、自然の造形美を堪能するという計画だった。ラスベガスからモニュメントバレーまでは片道285マイル、約7時間かかる。因みに、今西さんは私達のネパール在勤時代に同じくJICAのカトマンズ事務所で青年海外協力隊の業務調整員をされていた。その後協力隊シニア隊員としてバングラデシュに2年駐在され、私が出張でダッカに滞在した際にも夕食をご一緒させていただいたりしている。

剣道遠征といえば4月の「クリーブランド剣道トーナメント」を思い出してほしい。出発日当日になって樹生が熱を出し、仕方なく私1人で遠征に出かけて、その後暫く美澄との関係が険悪になったあの悪夢の出来事である。今回は6月に既に樹生も千智も一度体調を崩したこともあり、ラスベガスは大丈夫だろうと楽観視していたところ、出発の2日前の夜、窓を開けっ放しで寝てしまったことがあり、樹生が軽い咳を時々するようになった。しかし、症状は悪くはならなかったため、大丈夫と判断して、13日夕刻、家族全員が飛行機に乗り込んだ。



そして問題の翌14日。朝の樹生は元気だった。午前中の剣道講習会見学を終えた後、ホテルに戻る途中で千智が車中で寝てしまったため、樹生は美澄と一緒に、宿泊先の「サーカス・サーカス・ホテル&カジノ」の施設見学に出かけ、カジノ・フロアの上で展開される空中ブランコショーを見た。その後千智も目を覚ましたので、家族全員で、ホテルに隣接するテーマパーク「アドベンチャー・ドーム」に遊びに出かけた。樹生の身長では利用できるアトラクションは限られてしまうが、それでも機関車による小型ジェットコースターとか、メリーゴーランドとか、樹生は次から次へと乗り移り、相当ご満悦の様子だった。

一方で、前夜からの睡眠が足りない私と美澄は、樹生を追いかけるのが大変だった。

こうして遊園地を堪能した樹生君、その後美澄がホテルロビーのチケットオフィスで夜のショーの予約を取ろうとしていた時、突然「ボクもう眠い」と訴え、遊園地で振り回されたオヤジは、カジノシティでの洒落たディナーを諦め、勝手に眠ってしまった樹生を抱いて、客室まで戻り、そのまま留守番することになった。最初は時差ボケ（DCとラスベガスは時差3時間）で眠くなったのだろうと軽く考え

ていたのだが、その晩から樹生の体温が上昇し始め、翌 15 日も体温 38~39℃台で一進一退、樹生は食事を取らず、ベッドの上でゴロゴロして過ごす結果になった。

さらに、16 日朝の状態を見てモニュメントバレー行きはキャンセルし、ホテルでもう 1 泊することにした。16 日は、さすがに美澄も樹生に風邪薬を飲ませる決断を下した。携行していた「タイレノール」が効いている間は樹生の体温も比較的下がり、夕方頃には樹生も「ラーメンが食べたい」と口にするようになった。それに気を良くした私達は、今西夫妻とのディナーに家族全員で行こうと考えたのだが、ご夫妻と待ち合わせた直後から樹生の症状は再び悪化し、39℃台後半の体温に逆戻りしてしまった。こうなると 17 日もどう過ごしたらよいか判断に困る。朝 11 時にはチェックアウトしなければならないことを考えたら、ここは緊急で医者に見てもらおう方が後々後悔しないだろうと意を決し、午後 10 時にホテルの緊急医療サービスに連絡し、医者に来てもらうことにした。往診料 200 ドル、プラス抗生物質代 50 ドルの支払いとなった。抗生物質を服用したその夜の樹生は最悪で、体温もとうとう 40℃を超え、熱でうなされ、時には暴れて、美澄も私もろくに眠ることができなかった。加えてこの夜は千智も下痢気味で、夕食後ウ○チを 1 回した後、夜中にもオムツ内でウ○チを大爆発させ、溢れ出した液体が、寝巻きとシーツ・枕にも付着してしまい、私達は室内にたちこめる悪臭にも悩まされた。



17 日朝。この日は樹生が回復していればせめてユタ州のザイオン国立公園にでも日帰りで行こうかと計画していたが、これもキャンセル。ぎりぎり 11 時までチェックアウトを引き延ばした後、今西夫妻がその日から宿泊を予定していた「ルクソール」に移動し、今西さん達の宿泊する客室で、樹生は休息を取り、午後 10 時過ぎの帰りのフライトを待つことにした。

こうして、樹生にとってのラスベガスは、遊園地以外に何ら楽しい思い出がない街となってしまった。DC に戻ってきた樹生は、あの体調不良が嘘のようにケロっとしており、以前にも増して騒々しくなった気がする。美澄にとっても、樹生の看病のために殆どの時間を客室内で過ごし、TOEFL の勉強は進んだものの、14 日夜に 1 人で出かけたショー以外には楽しい思い出のない旅に終わってしまった。2 人が客室で過ごしている間、私と千智は、今西夫妻にあまりご迷惑をかけてはいけなと、連日 4 時間程度の観

光ドライブにご夫妻と出かけ、フーバーダムとミード湖、バレー・オブ・ファイヤー州立公園といった、ラスベガス郊外の観光スポットをまわってきた。後述する昇段審査の結果も含め、私自身にとっては収穫のあった旅だったけれど、16 年前の留学時代から機会があれば行きたいと常々思っていたモニュメントバレーを今回も見逃したことが悔やまれる。元気なのに越したことはないにせよ、ラスベガスから戻ったとたんに騒がしい樹生を見ていると、「バカヤロウ」の一言でもぶつけてやりたい衝動にかられる。リベンジのチャンスは訪れるのだろうか？（浩司）

ラスベガス家族旅行 (その2) オヤジ剣士、三段に挑戦!

ラスベガス旅行の最大の理由は、7 月 14、15 日に同地で開催された全米剣道連盟主催の講習会に参加することだった。講習会終了後、全米剣連主催の昇段審査が開催されるため、時期尚早だとは思ったものの、私もダメもとで三段に挑戦してみることにした。

昇段審査の構成は、①実技審査（決められた時間で別の受験者とペアを組んで地稽古のパフォーマンスをする）、②日本剣道形（実技審査合格者同士がペアを組み、木刀を用いて剣道の基本技の演舞を行なう）、③筆記試験（剣道の理念についての問いに答える論文を作成）、から成る。実技審査が最も難し



く、実技を通れば形審査は9割以上の確率で合格すると言われている。筆記に至っては形式的なもので、日本の場合、昇段審査の当日のお昼頃になると会場内に妙なペーパーが出回り、試験問題が事前に漏れる。だから、筆記試験が始まると、皆が示し合わせて同じ解答をしたものだ。

従って、今回最も力を入れたのは、当然ながら実技審査をいかにクリアするかだった。6月後半からは、バージニアのOakton Clubに加えて、メリーランド側のRockville Clubにも出かけて、できるだけ有段者と練習するよう心がけた。また、早朝スイミングに代わって、暫くは竹刀の素振りを30分ほど行なった。一方で、日本剣道形の審査

は、多少軽視していたことは否めない。

日本剣道形は大太刀7本、小太刀3本から構成され、全日本剣道連盟(全剣連)の昇段審査要領では、初段は大太刀3本目まで、二段は大太刀5本目までが審査対象となるが、全米剣連では、初段は大太刀5本目、二段は大太刀7本目、三段以上は大太刀、小太刀をフルセットでできなければならない。私が1981年に二段を取得した時には5本目までしか経験していないので、今回実演する形のフルセットはかなりの懸念材料だったが、OaktonでもRockvilleでも形の練習相手がおらず、結局直前にOaktonのマホーニー先生に頼んで30分間だけ個人レッスンしてもらった以外は、庭で木刀を振ってなんとなくやっただけという状態だった。どうせ講習会2日目は全て形の講習に充てられるのだから、そこで覚えればいいとたかをくくっていた。この考え方が甘かったことは、当日になって嫌というほど痛感させられることになる。

そもそもこの講習会、私は剣道少年団の夏合宿程度の軽い考えで参加を申し込んだのだが、実際会場に行ってみると、参加者は100人強で、その時初めて聞いた説明では、全剣連の師範の先生を日本からお招きして全米の剣道指導者を対象としてリフレッシュトレーニングを行なうというのが目的であり、とにかく徹底して基本のおさらいをするというものだった。従って、参加していた剣士の殆どが三段から七段の指導者ばかりで、私などは極めて若輩の部類に入っていた。それだけでも緊張したが、さらに追い打ちをかけたのは、アメリカでは、普段の練習から初心者にも日本剣道形を教え、凄いところでは居合まで教えているので、実技が初段や二段並みの剣士でも、実は形は非常に上手いということだった。2日目の形の講習は、大太刀6本目以降が全くできない私は1人浮いてしまい、非常に恥ずかしい思いをした。昼休みも相手を見つけて必死で復習をしたくらいだ。

こうして講習会を終えて、いざ昇段審査開始。形については全く自信がなく、どうせなら実技で不合格になった方が気が楽と、弱気の虫が自分の心を支配していた。4人が受験した三段の実技審査、相手を交替して1人2回の地稽古を行なったが、なぜか私は相手に恵まれ、1人だけ実技を通してしまった。1人で形はできないので、結局四段の実技合格者と組まされてどうにかこうにか最後までやったけれども、演技の最中に何ヶ所か間違えたことに自分でも気付いていた。日本では、形審査は受験者全員が仕太刀、打太刀に分かれて一斉に行なうが、こちらでは10人くらいの審査員が見守る中で1組ずつ演技するため、日本と比べても形審査は厳しいという印象を受けた。結果は不合格。9割以上の確率で落ちないと言われていた形審査での見事な不合格であった。唯一の救いは、次回昇段審査では実技免除で形審査から受験可能(英検みたい?)ということ。幸い、8月下旬に米東部地区剣連主催の昇段審査がコネチカットで開催されるので、暫くは形の練習をきちんとこなして、万全で臨みたいと思っている。

因みに筆記試験であるが、アメリカのやり方は試験問題を渡されて解答は後日剣連宛郵送というもので、会場の雰囲気的には、型審査に合格した受験者には「おめでとう」という祝福の言葉が連発されていたので、筆記は日本同様形式的なものだということらしい。(浩司)

真夏の試行錯誤(3) 合気道ママ、密かに練習中

(美澄さん、自分でこの欄を書くのは恥ずかしいそうなので、不肖私が代わりにご紹介します。)

私が今年1月こちらで剣道を再開するに当たって三鷹のお父さんに竹刀と胴着、防具一式を空送していただいた際、段ボール箱の空きスペースが出来て、そこに美澄は合気道の胴着を入れてほしいと頼んでいた。美澄は未だJICAに勤めていた頃、仲の良かった友人に倣ってほんの短い間だったけれども合気道をやっていたことがある。樹生が生まれた時、3歳になったら剣道を習わせたいと考えた私に対して、美澄は合気道を習わせたいと意見が衝突したこともあった。

私がこちらで剣道を始めると聞いた時、美澄はすぐに自分も合気道をやろうと考えた。しかし、バージニア北部に剣道クラブは3つしかないのに比べて、インターネットで調べると合気道はアーリントン郡だけで4、5件道場があり、しかも週2、3回は練習をやっていた。合気道がこれだけ盛んなのは、指導者も受講生も警察や軍関係者が多いからだと思う。我が家から最も近い道場に見学に行ったことがあるが、レベルが高過ぎて美澄は怯んでしまった。結局、いきなり道場通いは大変だということになり、もう少し時間をかけて調べ、期間限定でアーリントン郡が開催しているカルチャー教室みたいな所を探し出した。7月に入って開講されたクラスは週2回の6週間コースで、美澄は先ずはできる範囲で通うことにした。

胴着に着替えて出かけて行く姿は、柔道のヤワラちゃんみたいでなかなかキュートだ。できるだけ続けて道を極めるべきだと思う。合気道に昇級試験があるのかどうかはよく知らないが、アメリカ国内旅行の良い口実にもなるので、本人が行く気がなくても、絶対行かせたいと思う。人間目標をはっきり定めた方が絶対努力するんだから。(浩司)

真夏の試行錯誤(4) Mikio、雨のち晴、ときどき夕立

樹生はとても元気がよい。時々暴れすぎて体調を崩すけど、引っ込み思案で異文化環境に適應できないよりはよっぽどマシだと思う。ただ、日中の遊びに飽き足らず、夜になっても居間のソファで逆立ちをやったり、寝室のベッドで前転したりするのは行き過ぎだ。こいつのエネルギーはもっと発散させた方がよい——こう考えた私達は、託児センターが夏季プログラムに入ったのを契機に、毎週土曜日の朝、近所にあるフェアファックス郡レクリエーション・センターの4、5歳児向けの体操教室に樹生を叩き込むことにした。どうせならちゃんとしたマット運動や平均台ができればいいと考えたのだ。

丁度同じ時間帯にTOEFL受験コースを受講している美澄に代わり、私が樹生を連れて行くことになった。しかし、初回を外耳炎(「サンチャイ通信」第4号ご参照)で欠席した後、樹生に対して十分な事前説明をせずに突然連れて行ったのが良くなかったのか、はたまたインストラクターのジェイソンが、スキンヘッドに無精ヒゲでちょっとネオナチっぽくて危ない風貌(これでもフェアファックス郡のプールのライフガードなんだって!!)だったのに怖気づいたのか、樹生は初日のクラスに全く加わろうとせず、挙句の果てにスタジオの端に置かれていたマットに肩肘付いて「ボク眠い!」とのたまわった。逆に私と見学に来ていた千智はやる気満々で、お兄ちゃんお姉ちゃん達の前に無謀にもしゃしゃり出て、クラスを妨害しまくった。オヤジは赤っ恥かきっ放しだ。

次のクラスまでの1週間、樹生の「洗脳」に努めた。最初は「いい子にしてないとまたジェイソンのところに連れて行くぞ!」と警告のいいネタに使っていたが、本番前日には、「ちゃんとジェイソンのところに行って皆と一緒に体操やったら、(ビニールの)プールを買ってあげよう。」(出た、子供をあやす常套句!)で、樹生をその気にさせた。結果は吉と出て、樹生は初回からは考えられないくらいに積極的にクラスに溶け込んで楽しくやってくれた。他の子供達は4歳になったばかりの樹生に比べて体格も良く、樹生が全てのメニューを他の子供達と同様にこなすのは大変だったかもしれないが、45分間を気持ちよく過ごしてくれたのは大収穫だった。

この姿を実家の爺婆に見せようと、第3回のクラスにはビデオカメラを持ち込んで、樹生が元気に体操している姿を撮ろうと試みた。ラスベガスから戻った直後で、未だ時々咳き込むことはあったが、普通に体操はできるだろうと期待した。ところが、朝ごはんをきちんと食べなかった樹生君、最初こそ機嫌良く体操をやっていたが、クラスが30分を経過した頃から突如としてグループの輪から外れ、「ボクお腹がすいた!」「ボクもうできない!」とほざき始めた。他の子供達が「どうしたの?」と心配してくれたのにも反応は鈍く、結局最後までクラスに復帰しようとしなかった。クラスが終わった後は、「マクドナルドに連れて行ってよ!」と来たもんだ。この間、千智は相変わらずやる気満々、未だ両足ジャンプすらできないのに、果敢にも平均台に乗って歩こうと試みていた。

樹生をいかにやる気にさせるかは、大きなテーマだ。1つうまく行っても、すぐに次の課題を突きつけてくる。子供と接するのはつくづく難しい。(浩司)

私の仕事紹介(その3) **北欧援助国はこんなに違う!**

これまで「サンチャイ通信」ではあまりきちんと紹介してこなかったが、私の仕事は世銀に対して出資している国(ドナー)や援助機関との対話、連携促進を司っている。世銀は発展途上国(クライアント)に資金貸出(一部の国では贈与)を行なっているが、その原資は、債券市場での資金調達他に、主要先進国からの拠出金(IDA増資)や、これら出資国が世銀に資金活用を託す信託基金、途上国からの返済金や利息収入等から成る。言わば、出資国は、世銀にとっては株主なわけだ。従って、我々の仕事は、株主様のご機嫌を損ねないように気を配る必要がある。

4月初旬のJICAとの定期協議を皮切りに、私は、ドイツ技術協力公社(GTZ)やデンマーク外務省と世銀の定期協議のアレンジを行なったが、特にデンマークとの協議は印象的だったので紹介したい。デンマークは、IDA増資や信託基金の拠出に際して、世銀を通じて自国の対途上国援助政策における重点課題の実現を目指すという明確な姿勢が見られる。自分達が信任して資金を拠出している相手の世銀が、自国の意に添わないODA政策を取ろうものなら、すぐにクレームを行なう。現在2002~2004年度の各国出資額を決めるIDA第13次増資交渉が行なわれているが、これまでパリとアジスアベバ(エチオピア)で開催されてきた2回の増資交渉会議では、デンマークは他の北欧諸国と同様、IDA増資に応じるにあたって、紛争復興国支援や環境問題、HIV/AIDS問題、女性や社会的弱者の支援等の課題において、世銀はどのような政策を取るべきか、必ず発言をしてきた。6月中旬に行なわれた世銀との定期協議では、4月末にワシントンで開催された開発委員会で承認された世銀の中期的政策方針案に関して、デンマーク側代表団は、委員会に提出された提案書を熟読し、それをどのように進めるべきかについて、細部の確認に努め、言うべきことは言うという姿勢に徹してきた。

翻って我が日本であるが、世銀と定期協議を行なっている外務省、JICA、JBIC(国際協力銀行)は、いずれも世銀との間に出資関係がないため、世銀に対するドナーではない。自ずと定期協議における代表団の発言は、世銀を1対1の対等なパートナーと見なして行なわれており、出資関係を盾に世銀に日本の援助政策の重点目標への配慮を求めるといった姿勢には欠けているように思う。特に、JICAやJBICは援助の実施機関なので、世銀との協議は個別プロジェクトでの具体的連携の話が中心になる。ODAの政策を議論するのは外務省が本来やるべきことなのだろうが、実は外務省が世銀と政策協議をやることは財務省(旧大蔵省)との関係があって非常に難しいのが現状だ。日本のODAを詳細に見ていくと、世銀への増資や信託基金の拠出は財務省が直接行なっている。世銀にとっての「ドナー」とは、財務省のことを指す。しかし、財務省は、デンマーク外務省のように代表団を送り込んで世銀の政策に口を挟むことはやっていない。だから、世銀にとって、日本は、「カネは出すけれども口はあまり出さないドナー」と映っている。理想的には、ドナーたる財務省と、政策立案を司る外務省と、援助の実施機関であるJICAとJBICが、合同で代表団を送り込んできて、資金拠出をちらつかせながら、世銀の援助政策に細かく注文、しかも現場での経験に裏打ちされた注文を付けるのが理想の姿なのだろうが、まだまだ先の話のような気がする。

デンマークの ODA 対 GNP（国民総生産）比は、1.06%（2000 年）で、現在 1%を超えている唯一の先進国だ。対する日本はというと、0.27%に過ぎない。日本の場合は分母も分子も大きいので援助の絶対額はデンマークよりも圧倒的に大きいという意見もあるし、デンマークの場合は国際問題と国内問題の垣根が明確でなく、途上国援助が国内の市民運動と結びついている度合いが大きいといった社会構造上の違いもあるため単純な比較はできないけれども、これだけ高い割合を途上国援助に振り向けているデンマークでは、援助の効率や効果に対する眼もまた極めて厳しいという気がする。日本も頑張らねばと勉強させられる。（浩司）

速報！私の投稿文書が雑誌に掲載されます。

アメリカでゆとりある生活を送っている間に資料をたくさん読んで、颯爽と論壇デビューを…と考えていた矢先、日本大使館の紀谷書記官から誘われ、「国際開発ジャーナル」の 6 ヶ月連載シリーズ『ワシントン便り（仮題）』の第 2 回（ひょっとしたら第 3 回分かも）を私が執筆することになりました。9 月初旬発売の「国際開発ジャーナル」10 月号に掲載される予定です。ご興味ある方は是非ご覧下さい。

暴走ドライバー、法廷に立つ！

5 月 18 日に私がスピード違反&無免許運転&車両登録証不携帯で警察のお世話になった話は「サンチャイ通信」6 月号で紹介した通りだ。あれから 2 ヶ月以上も経過した 7 月 25 日、私は遂にアーリントン郡地方裁判所の法廷に立った。

法廷を舞台にした映画や TV ドラマはいくつかあるので、ご覧になった方も多いのではないかと思う。道路交通法関係専門の法廷ではあるけれど、まさに映画やドラマのまんま、司法取引あり、弁護士の能弁あり、被告人の悪あがきありで、なかなか面白かった。10 時 30 分に召喚されていたが、訴追人である警察官毎に案件をまとめて審理するため、私を捕まえた警官の順番が遅かったのに加えて、被告人の苗字のアルファベット順に審理されたこともあって、私の出番は 3 時間以上経過した午後 1 時 30 分過ぎだった。お陰でいろいろわかったことがある。

- スピード違反は 1 マイルにつき 3 ドルで罰金計算する（15 マイル超過の私は 45 ドル）
- この計算で裁判の前に罰金を納めてしまうことができる。スピード違反だけだったら、事前に罰金を納めれば出廷しなくてもよいケースがある。
- 時速 9 マイル超過でも捕まっている奴がいる。
- 我が家の少し北にある Williamsburg Blvd（ウィリアムズバーグ大通り）は、ネズミ捕りのメッカ。私以外にも数人スピード違反で捕まった奴がいる。
- 審理を欠席しても裁判は行なわれる（いわゆる「欠席裁判」）
- 一旦停止の標識では完全に停車した方がよい。止まり方が不十分で捕まった奴も何人かいた。

最大の驚きは、法廷で素直に罪を認めず、警察官と争う被告人がかなり多かったことだ。たとえばスピード違反であっても、測定したスピードガンの誤作動のせいにするとか、隣の車線を走っていた車（その車と間違えて自分を捕まえた警官）のせいにするとか、ありとあらゆるロジックを駆使して、罪を逃れようと画策する。たかが 15 マイル程度のスピード違反（罰金 45 ドル）で、弁護士を雇ってそれぞれドラマまがいの裁判劇を演じたオネエサマもいれば、わざわざ自分で現場検証をして集めたデータを元

に行なったシミュレーションの結果を発表して、「理論的に自分がスピード超過していたとは考えにくい。」との論陣を張ったご立派なオバサマもいらっしやった。この2つの例では減刑は認められなかったが、一方で、我が家の近所にある左折禁止の交差点で左折を試みて交通大混乱を招いたオネエサマが「自分の出身のフロリダ州では、これは罪にならない。」と訴えたら情状酌量が認められたりもして、粘って減刑を勝ち取るケースも結構目立った。でも、こうして散々待たされた私は白けてしまった。裁判官はずっと同じ方だったので、さぞかしお疲れになったことだろう。

私はスピード違反については素直に罪状認否で罪を認めたが、無免許運転と車両登録証不携帯についてはその時は家に置き忘れたと説明してその場で免許証と車両登録証を提示したら、この2つについては無罪になり、罰金はスピード違反分だけで済んだ。これに裁判手数料30ドルを加え、合計75ドルの小切手をその場で切り、裁判所に収めた。私の場合は、法廷で免許証と車両登録証を提示すれば減刑されることが予めわかっていたので、先に述べたような裁判前に罰金というのはできなかった。

もう1つの印象。被告人側にヒスパニック系の住民がかなりいて、スペイン語の通訳が付かないと審理がまともに行なえないケースがかなり多い。アーリントン郡南部はヒスパニック系住民がかなり多い。数ヶ月前の新聞にアメリカの人口センサスの記事が出ていた。ヒスパニックだけが急激に増えているそう。そのうちに、スペイン語もアメリカの公用語になるかもしれない。(浩司)

エステイトセール

7月27日(金)、隣のニーナに誘われて「エステイトセール」に行ってきました。「エステイトセール」とは、その名の通り「財産処分セール」で、死んだ人の物を故人の身内の者が引取らないで売って処分するというものです。時々破産した人の物もやるそうですが、家中の物をすべて売り尽くすのでドライバー1本、めがねまで値段がつけてあります。アメリカではポピュラーらしく、新聞のクラシファイド(売りたい、買いたいコーナー)に広告が出ています。

私が行った家は、アーリントンにある比較的小さな家で、私たちが着いた時にはもう人が外に並んでいました。列のところに番号札が置いてあり、私は98番、ニーナは99番でした。セールは既に始まっており、家の中には最初の方が品物を物色中で、時々手に荷物を持った人が出て来ると次の人が呼ばれて中に入っていました。待つ事1時間、ようやく順番が回ってきて家に入ると、家の中の物全てに値段が付けられ売りに出されていました。この家の持ち主は年配の軍人だったらしく、制服や昔の書類(これには紙一枚に40ドル、30ドルという値段が付けられていて驚いた)、年季の入った食器や家具などがありました。私の目に付いたのは手書きの九谷焼の陶器、ナルミの食器セットなど日本製の陶器でした。しかしデザインが派手だったのと高かったので買わず、結局お鍋の中に入れて使う簡易蒸し器(50セント)1つだけを買うことにしました。

家の中の物全てが見れるので、その人の趣味や生活がわかって面白いのですが、物色しながら、「普段他人の家にはなかなか入れないけど、こうやって見知らぬ人たちが大挙して入って来て、自分の物を物色して買って行くのを故人が見たらどんな気持ちだろう。」と思ったら変な気分でした。ニーナによると、「彼は本ばかりを狙ってくる。あの人はよく見る。」というようにエステイトセールは、それを狙う専門業者もおり、アンティークを扱うお店はこういうところから品物を仕入れているらしいです。

ニーナは子供のベッドなどはエステイトセールで購入しペンキを塗って使っているそうです。ニーナの今回の収穫は、お皿1枚(同じシリーズのものを持っているらしい)、ベッドカバー(何回も洗って漂白してソファカバーに使う)、鳥の絵のパズル(鳥が好きな娘のおもちゃに)でした。帰ってきてから日本人の友達に話したら、その人の知人でも家の家具の殆どをエステイトセールでそろえている人がいるとのことで、1回利用したらなかなか止められないようです。かくいう私も、最初に話を聞いたときは「死んだ人の物を買うなんて!」と思っていたのですが、機会があったらまた行きたいと思っています。それにしても合理的というかアメリカならではの発想ですね。(美澄)

編集後記

- 先月号の「サンチャイ通信」を電子メールに添付して送付した際、「ポイズンアイビーのイラストが表示されない」というご指摘を何人かの方々から頂戴しました。現在私が管理している「サンチャイ・イントラネッツ (<http://sanchai.intranets.co.jp/>)」に同文書をアップロードした際にも同様の問題が起きましたし、6月にバングラデシュについてプレゼンテーションをやった際の資料をイントラネッツに載せた時にも、同国の地図が表示されないという問題に気付いていました。また、添付ファイルは圧縮して送付するのが受信者の方々へのエチケットだとわかっていながら、圧縮・解凍ソフトをウェブサイトからダウンロードした後、使い方がわからずに結局圧縮せずに先月は送信してしまいました。これらの問題解決に向けて、貴重なアドバイスをしてくれたのが、今は京都でソフトウェア制作会社を営んでいる弟の宏和でした。また、我が実家の父母にパソコンの基本的な操作をアドバイスして、電子メールでのコミュニケーションを円滑にする手助けをしてくれているのも弟の哲也です。こうして住んでいるところはバラバラでも、影に日向に助けてくれて、やはり持つべきものは兄弟であると実感させられます。樹生君、わかっている？ あんまりちーちゃんを叩いちやダメよ！ ちーちゃんも、お兄ちゃんをあまりイジメないでよ!! (浩司)
- 昇段審査受験の際の話題をもう1つ。四段の受験者の中に、実技審査で二刀流を使っていた方がいました。二刀流は日本での10年間の剣道生活で一度もお目にかかったことがなく、それくらい実戦での有効性には疑問が持たれていて日本では不人気だったのだと思いますが、こちらでは宮本武蔵がやっぱり有名で、武蔵から剣の道に入ったという方が多いらしく、Oaktonのヤン先生が時々試される他、DC地区の結構シニアの剣道家の何人かが二刀流で、私は稽古で対戦した経験があります。ただ、武蔵が二刀流を実戦で使ったという話は実ははっきりしてないし、上段で構えた大太刀を片手1本だけでコントロールするのは非常に難しく、個人的な印象を言わせてもらえば隙だらけだと思っていました。もっとも、対逆二刀に有効な逆胴、逆小手は、普段はあまり練習しない打突部位なので、相手が慣れていない間は奇襲戦法としての逆二刀は有効かもしれません。しかし、それで三段を取得して、なおかつ四段まで挑戦する人がいたのには驚きです。でも落ちちゃいましたけど… 因みに、ヤン先生は、普段は正攻法の正眼の構えを取られます。(浩司)
- 樹生の外耳炎の後日談。4歳児検診に連れて行った時、先生に外耳炎になった話をして耳掃除のことを聞いたら、「オキシフルと水を1対1で混ぜたものを、お風呂の時に2、3滴耳に入れて洗って下さい。」ということでした。綿棒では耳垢を押し込んでしまうけど、こうすることで耳垢が溶けて出しやすくなるそうです。1回樹生に試しましたが、ものすごく嫌がったのは言うまでも無く、樹生だけでは申し訳ないので自分にも試してみましたが、あまり気持ちのいいものではありませんでした。耳に水を入れて大丈夫なのかな？という不安がありますが、所変われば治療法も変わりますね。(美澄)
- 今月号はラスベガスの話題が多いですが、樹生に熱を出され私は殆どホテルの部屋で過ごす事になり、先月号の「サンチャイ通信」でご紹介したTOEFL講座の宿題が出来たのは良かったのですが、結局観光は殆ど出来ませんでした。ラスベガス滞在中唯一楽しかったのはショーを見たことです。「Splash」というショーで、アイススケート、歌、踊りと色々な要素があり、それを見ながら「自分はこんな風にショーを見るのが好きだったんだな。」と思い出し、子供達を寝かしつけてくれた浩司さんに感謝です。欲を言えば、一人でなく家族も一緒にみれると良かったけど……。まだまだ先の事ですね。(美澄)